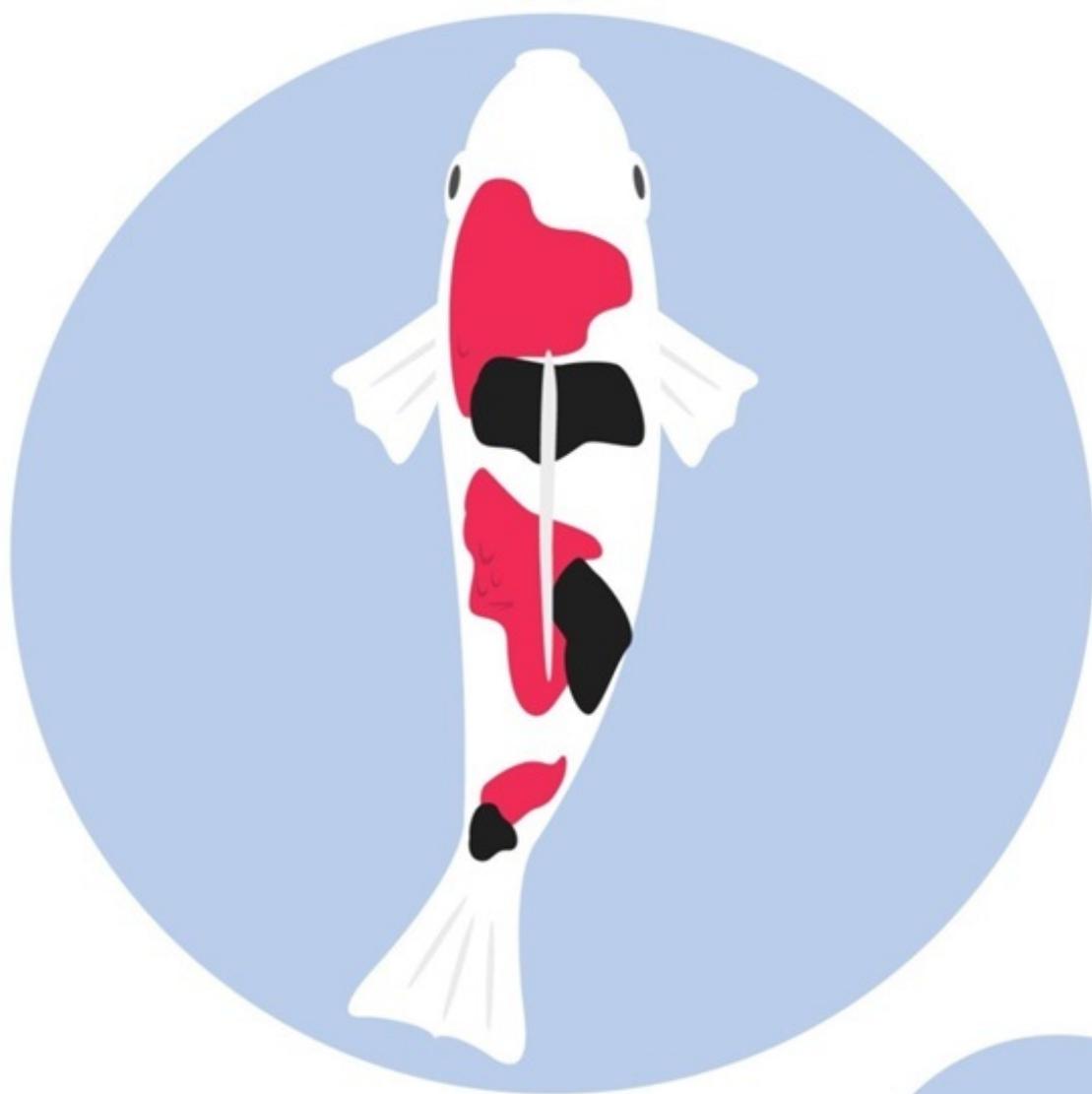
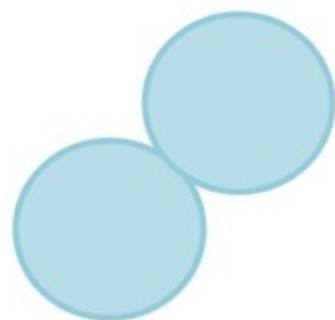
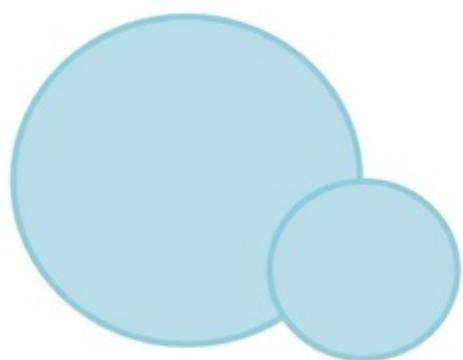


創星

SOU SEI

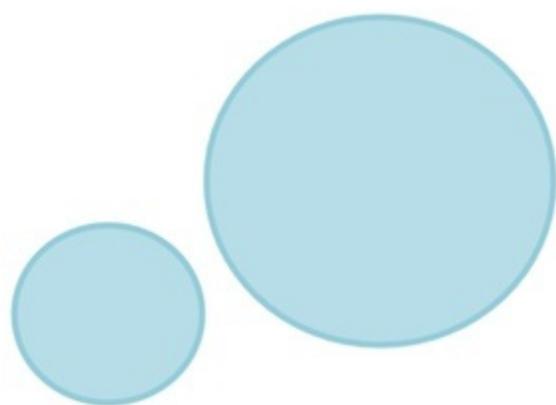


vol.13



創星

13





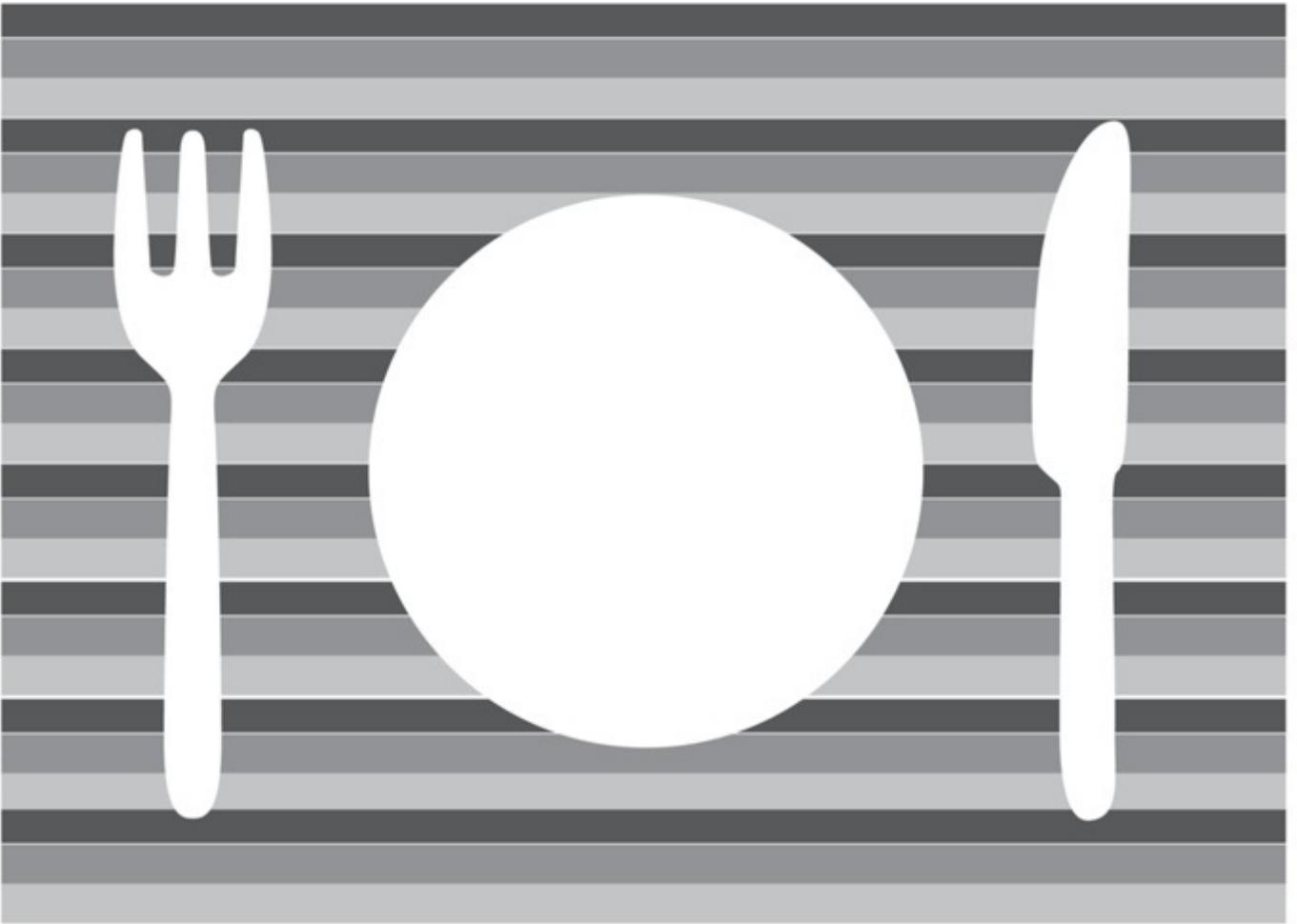
CONTENTS

創星
2016.06 vol.13

なめくじについて	間々えいよ	三
締め切り	詠人不知	四
タンカトイラスト	松田定幸	七
詩「十字架にくちづけを」	ぼえまる	十一
告知！		十三
不幸自慢は嫌われる	馬場貴生	十四
「狭間」特別版4-1	甲斐聖子	十六
鳳凰星座	松田定幸	二十一
クラシック音楽・教養のお時間	天沼太郎	二十二
木の魚	マチコ・ムツゴスキー	二十四
ペットの王様	一路真実	二十六
Philosophy of Stardustbooks		三十四
編集後記		三十五

☆表紙デザイン 間々えいよ





なめくじについて

なめくじのごはんは夜空の星
にちがいありません
でなければ あんなにきらきらひかる
ものをだせないでしょう

なめくじの世界は平和
にちがいありません
仲間をころしたとしても
きらきらひかるあとを
たどれば目星がつくでしょう

なめくじの特技は演じること
にちがいありません
あの葉っぱにいるカタツムリは
実はなめくじなのです
つかまえにきたフランス人も
スターの演技におどろくでしょう

そんなことを考えたら
きらきらとした塩を
かけることができませんでした

締め切り（詠人不知）

締め切り

よみびと
しらず
詠人 不知

締め切りギリギリになって、というか、締め切りを過ぎてしまつて、ようやく重たい腰を上げようと思ひながら、大の字で寝そべり、気付けばそのまま、いびきをかいていた小生は、いっこうに何も書いておらず、編集長からの原稿締め切りの催促電話にまたも起こされた。

六畳一間、ジリジリと迫るジリリリン。

いっそ、居留守を使うか？

いや、しかし、居留守を使った所で、編集長の催促電話地獄から逃れられるわけではない。

いっそ、声色を使うか？

「もちもち、わたし、よちこちゃん。」

…いや、しかし、声色を使った所で、編集長も、

「あ、詠人先生のお宅ではごさいませんでしたか、こりや、失敬。」

とか抜かし、電話番号の書かれた手帳をしっかりとざりながら、またジリジリと迫るジリリリンである。

故に編集長の催促電話地獄から逃れられるわけではない。

はてさて、逃れられる術はないものか。

フケの山盛りとなつたボサボサ頭をボリボリとやりながら唸つておると電話は切れてしまつた。

「へ、へへ、へんしゆうちよう？」

どうしてしまつたんだ。そんなコール数で原稿の催促を諦めてしまふような、やわな男ではなかつたはずだ。

もつとアグレッシブで、ほとぼしる汗とパッションの最たるものを、ジリリリンのコール音に感じさせていたではないか。

ある時はその事について、編集長と夜通し語り合つた事もあつたさ。

「夜中三時に、不謹慎にジリリリンと鳴らし続けるなんて、御主も悪よのう、ういっひっひ。」

当時はまだ編集長もかけ出しの新人で、よく小生を、

「詠人さん、詠人さん」と抜かしながら慕つてきたっけ。

それが、今や編集長だからな。大したもんだよ、ホント誰のお陰だつてんだ、はっはっは。

そんな編集長が、どうしてこんな拍子抜けするようなコール音を小生によこしてきたのか？

どうしてしまつたんだ、編集長。何があつたんだ、編集長。

思えば、編集長との出会いは、何から伝えればいいのか、わからないまま、時は流れて、浮かんでは消えてゆくありふれた言葉だけだつた。

小生は、あの日あの時あの場所で君に出会つたから今があるんだぞ。

なぜ、それを、あんなちゃんけなジリリリンで済ませおつたのだ、編集長よ。

…告白します。冒頭から今まで編集長などと気取つた呼び名を書いておつたが、小生との間柄は、そんなよそよそしいよそ行きスタイルではなかつた。

小生は、編集長の事を、編君と呼んでいたのだ。

なあ、編君、いじらしくも変君よ、君はどうかしてるぞ、変

締め切り（詠人不知）

だぞ。

あんなジリリリンで、この小生に、原稿の催促ができると本気で思っておるのか？

ま、まさか、

「詠人先生一筋ですハートマーク」

とか抜かしておきながら、他に小生よりもいい人が見つかった、そいつとよろしくやっておるのか？

「オーマイガー、オーマイラバー!!!」

これはいてもたってもいられない。

変君の変わりようを、指をくわえて黙って見逃すわけにはいかない。

しかし、どうしたものか。変君はいつの間に小生以外と関係をもったのか？小生以外の執筆者となぜ関係をもったのか？小生以外の執筆者と、原稿の催促電話のやりとりを楽しんでおるというのか？

「泥棒猫先生(仮名)、今回の原稿は出来てますか？」

「あつたり前田のクラッカーよ、編ちゃんハートマーク 私は

仕事と手が早いからね。」

「もう、泥棒猫先生(仮名)つたらハートマーク」

「ニャンニャンニャン、とつても大好き、化けねここお。」

「ア〜レ〜えええええ。」

オトウオ〜サク〜オトウオ〜サン!!!

「化け猫〜!!!!!!!」

そう叫んだ時には、もう編集元である星屑書房に怒りのジリ

リンをしていた。

握りしめた受話器の向こう側から、甲高い奇声を上げ出てきた。

「お待ちせしました、こちら星屑……」

「てめえ〜!!!!!!!」

「しよ……しよぼうですが……」

「ぶあつ、化け猫野郎、てめえ!!!!!!!」

「……ば、ば、化け猫野郎でございましょうか!?!」

「すうおくだ!化け猫野郎だろ、てめえ!!!!!!!」

しばらく状況の掴めない星屑書房の電話応対人を、長い事まくし立てた結果、ようやく小生が言わんとする事を理解したのかしらぬが電話を代わった。

「お電話代わりました、詠人先生。」

その出てきた声に、素朴さと懐かしさ、愛しさと刹那さ、そして心強さを感じた。小生はすぐに、受話器の向こう側が誰なのかわかった。

変君に対して言いたい事は山ほどあった。何故、小生という素晴らしいお人がパートナーでいながら、化け猫などという箸にも棒にもかからないような、しょうもないキャツを受け入れたのか？

しかし、小生は、変君の声を聞いた途端、そんな事で腹を立てていたのが馬鹿らしくなってきた。

「いいじゃないかいいいじゃないか、変君よ。君の自由だわな。回り回って小生の所に戻ってくればいいのだよ、はっはっは。」

小生は、我ながら何と懐の広いお方なんだ。変君もまさか電話応対人へのまくし立てからの懐広しだとは夢にも思わない。

締め切り（詠人不知）

受話器の向こう側で声を殺し泣いておるのだろう。苦しゅうない苦しゅうない。なあ、変君、なあって。

しばらくニヤニヤしていた小生の耳元で、受話器越しに変君が囁いた。

「ところで詠人先生、原稿は出来ましたか？」

「…ふえっ？…いでっ、…いいえ…。」

オトウオウサクンオトウオウサン！！

(終)

タンカトイラスト



）
終恋・淡恋編
）

松田定幸



弥生月 断ち切る想い 注がれて

青に溶け散る 二の目の鉤

ポタン

水無月に

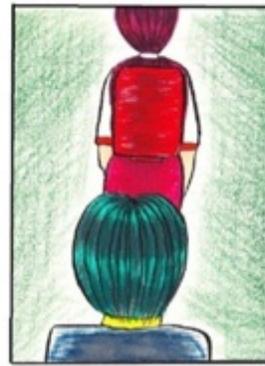
一つの傘の

下^{もと}
二人



立ち込む思い

濡れそぼる肩



「弟と 仲良くねッ」と 笑み受けて
灰ほのかに点つきし 思慕ともしがの 灯

詩「十字架にくちづけを」（ぼえまる）

詩「十字架にくちづけを」

ぼえまる

こころの中に消えない想いがある限り

だれにも消せない思い出がある

それはまるで……

盗めない宝石のように。

あなたは戸惑いを隠して

気づかないふりをしている

その痛み、気づかれたいと思っているの？

そんなあなたを

見て見ぬふりをする私も同罪かしら

傷ついたり、落ちこんだりした表情（かお）を

他人に見せないあなた

強がっているのかしら？

詩「十字架にくちづけを」（ぼえまる）

それとも

胸の内にこらえている涙も

痛みや苦しきも

すべて知っているのよ私

「十字架にくちづけを」と

あなたはそうって

遠い誰かを想い

さみしげに笑う

もう、1人で抱えこまないで

もう、1人で背負わないでいて

告知！

松田定幸

「十二画月」 修斗画廊一人展 (松田定幸 個展)
日時：平成 28 年 10 月 10 日(月)～16 日(日)
10：00～19：00 ※「体育の日」から一週間
会場：風の音ギャラリー ※入場無料
(福岡県飯塚市堀池 128-1 ・ さかえ屋本店 2F)
問い合わせ先：ameblo.jp/h032075
(修斗画廊オフィシャルブログ)

ぽえまる

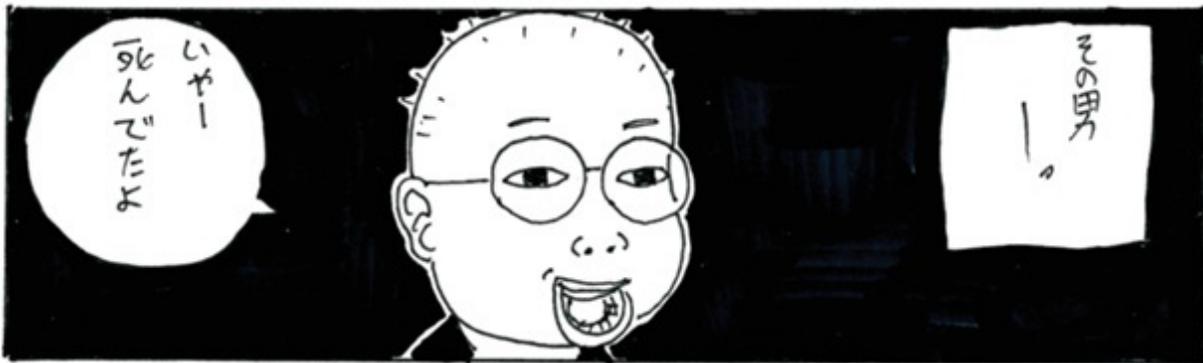
大分県大分市牧1丁目にある、大分県内の
ものづくり作家たちの情報発信基地
「さらだぼうる あず」にて、詩集などを
展示販売中です。
よろしく願いいたします。

星屑書房

フリーペーパー『創星』を置いていただける
場所を探しています！
下記までご連絡お待ちしております☆
stardustbooks@live.jp
<http://stardustbooks.jimdo.com/>

不幸自慢は嫌われる

馬場貴生





聞いていて
うんざりする

不幸自慢する
人っている
それが話者が
ないのたう。が



そして
去られるのだ

あ
えん

じゃあ
仕事やなのご



二のほらハハハハハ
うんざりだった

ほあ
ほあ



やはり
不幸自慢は
さらわれの
のだ!!

まみ
病気がやう
ケがやうには
同情するが

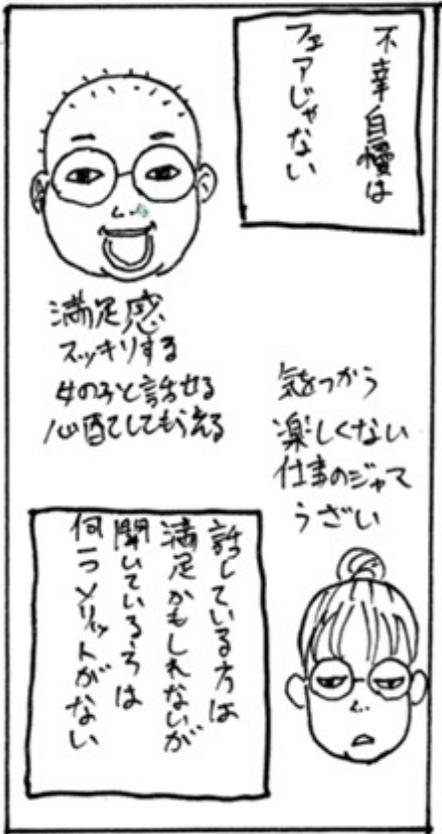


うんざり

さうと
飲社会でも
同じでうんざり
叫ばれまい

みんなも
不幸自慢は
しないように
気をつけよう

じゃあ
入院してこい



不幸自慢は
アアじゃない

満足感
スッキリする
女のみと語る
100%にわかる

気がつかう
楽しくない
仕事のジマ
うざい

話している方は
満足かもしれないが
聞いていこうは
何とノリトがたい



完

第1話 摩擦

スカートの裾を揺らし泣いた

ささいな力の差に耐えかねて
いつまで声を我慢するの？

十歳の泣き声

赤く染まったスカートは震え

寒さは強まる

強く流れる水をただ見つめ
復讐と涙が拳をあげはじめる

短いスカートを震わせ泣いて

第2話 歩み

歩く

地面と靴底をすり合わせ

歩く

目的地へ辿りつくように

人は

手探りで夢をまさぐって

人は

一度はそれを手に入れる

歩け

地面と靴底をすり合わせ

皆が

目的地へ辿りつくように

第3話 公園の

夕日

公園

ゾウ

砂場

泣きながらひとりで
泣きながらひとりで待っていたのは
オレンジ色が引っ張る暗闇でした

その手に私も引っ張られたいと
人と何かの隙間を探しました
公園に広がる世界は狭く
たくさんの声が消え
いつもひとり
だから
泣く
しか
なく
てね

笑っていたのは夕日だけでした

第4話 生きる

まざまざと見せつけられる光景
あたり前の仕草に切なさを覚える

日の光りに手をかざしてみる

命が溢れ皮膚を少しだけ薄くする

だからその光りを掬って睨み付ける

まざまざと見せつけられる光景
あたり前の人並みに儚さを覚える

第5話 帽子

日が照っているから帽子をかぶる

帽子の中で笑いながら涙をながす

ながれながれた涙は乾こうとせず

木々のせせら笑いが左耳を噛んだ

頬をつたう涙が日に照らされ光る

帽子の中で涙が飛び散り息を吐く

帽子の上の日差しと中の涙が叫ぶ

噛まれた左耳が脳神経を揺らした

痛む現実に耐えかねて帽子を探す

光りが眩しいと脳神経を騙しては

影を作るために帽子をかぶらせる



— Phoenix —

第11回 私の失敗日記、そして「演奏会前に予習は必要？」

何年か前、知人と演奏会に行くことになった。その演奏会の数日前、予習用にCDを薦めたところ、怪訝な顔をされた。音楽を聴きに行くのに、どうして前もって聴いておく必要があるの？と。

誰かのアドバイスか、あるいは聴き慣れない曲をどう聴いていいかわからず退屈な時間を過ごしたことが何度もあったせいだろう、いつの頃からか私は、演奏会前に演奏曲をあらかじめ聴いておくことにしている。

今回取り上げる演奏会

日時：2016年4月9日(土) マウリツィオ・ポリーニ(ピアノ)演奏会

会場：ミュージア川崎

演奏曲：ショパン：前奏曲 嬰ハ短調作品45、舟歌 嬰ヘ長調作品60、
2つのノクターン 作品55、子守歌 作品57、
ポロネーズ第6番 変イ長調作品53「英雄」

ドビッシー：前奏曲集 第2巻

演奏者は、以前にも紹介した名ピアニスト、マウリツィオ・ポリーニ。期待大である。ところが、演奏会場でプログラムを見たとき、しまったと思った。プログラムが演奏会の3日前に変更されていたことをすっかり忘れていたのだ。特に後半がシューマンの曲から、ドビッシーの前奏曲集第2巻にそっくり入れ替わっている。

なんとも恥ずかしいことに、ドビッシーの作品の大半は私にはよく分からない。ドビッシーはフランス音楽の代表的な作曲家である。陰影のはっきりしたドイツ音楽とは違って、曖昧模糊とした音の多用が特徴。私にはどうにも分かりにくい音楽ばかりなのだ。

今回演奏される前奏曲集第2巻(全12曲)は、これまで1、2回聞き流したことがある程度。第1巻(こちら全12曲)のいくつかは楽しめるが、私にはどう聴いたらいいのかわからない曲ばかり。かの名ピアニスト、リヒテルもこの中の一曲「亜麻色の髪の乙女」が苦手だったそうで、この曲だけ録音していない。演奏会でも「亜麻色」を除いて演奏していたと聞いている。そういえば、プログラム変更を知ったときすぐにCDを聴かねばと思ったのに、それっきり忘れてしまった。

さて、実際の演奏会。前半のショパンは素晴らしい演奏だった。私の好きな舟歌についてだけ書くと、音楽が自然に、優しく、時に情熱的に流れる。幸せに満ちあふれる中、一瞬「これは錯覚なのではないか？」と不安になる部分があるが、それがちょっとしたスパイスになっていて、鳥肌が立つほど素晴らしい演奏だった。曲は夢心地のまま唐突に終わってしまうが、演奏が終わってもまだ何か幸せな時間が続いている気がする。せっかちな拍手も起こらず、天上の10分間だった。

問題は、後半のドビッシー。案の定全く訳が分からない。前半のあの見事な演奏から、後半の演奏もきくと素晴らしい演奏に違いないのに。ちなみに、この前奏曲集は、どれも数分程度の小曲12曲からなっている。これがもし長い曲だったら聴いているうちにこんな曲なのだと分かる可能性もあった。でも今回、どの曲もすぐ終わってしまうので取りつく島がない。

ドビッシーが最初にこの曲を発表したとき、一曲終わるごとに「この曲のタイトルは・・・です。(分かったかな?)」と紹介したエピソードも思い出す。ならばと、タイトルを見ながら聴こうとしたけど、間の悪いことに、各曲のタイトルが書かれたチラシは椅子下のカバンの中。ごそごそと取り出すわけにも行かない。何か手がかりはないか、自分に分かる箇所がないかと演奏に集中する。しかし、音は聞こえてくるけど、音楽の中に吸

い込まれていくいつもの感覚が全く感じられない。ロックライミングしようとしたら、山肌がつるつるだったようなものである。集中力もやがて途切れ、結局なんとも退屈な時間を過ごすこととなった。

退屈しながら、あれこれ考えた。昔の人たちは、初めて聴く曲をどう受け取っていたのだろうか？もちろん、感覚の鋭い人が居る一方、そうでもない人が居たに違いない。でも、テレビもラジオもない19世紀ショパンやドビッシーの時代、人々は我々よりずっと鋭い耳を持っていたに違いない。私はCDやネットで音楽に慣れてから音楽会に臨む。特別な演奏は別として、まあまあの演奏会だったら特に驚くこともなく、自分の記憶が現実に再現されることを楽しむ。もし予習をみっちりやっておけば、実際の演奏との相違点に居心地の悪い思いをすることや、演奏家の間違いに気づくかもしれない。まるで演奏を採点しているようなものだ。

演奏を褒める際によく使われる言葉として、「音楽が今生まれているかのような演奏」というものがある。有名なところでは、フルドヴェングラーの多くのライブ録音、最近だとニコラウス・アーノンクール(2015年末逝去)のベートーヴェン交響曲第5番(ベルリン・フィル、2015年録音)など、楽譜が存在するはずなのに、次の瞬間どんな音が出てくるか分からない異様な雰囲気演奏である。

クラシック音楽の場合、新曲が出ることはほとんどない。もちろん、クラシック音楽の流れを汲む現代音楽作曲家もいっぱいいて、素晴らしい曲を作っている。けれど、残念ながら耳にする機会はほとんどない(頑張って探せば宝の宝庫が見つかる)。だから、未知の音楽を体験する機会は貴重である。今回のドビッシーも、考えてみればそのようなかけがえのない「未知との遭遇」的な機会かもしれない。けれど、どうしたことだろう、私に聞こえるのは無意味な音の羅列ばかり。

プログラムが終わり、今回はアンコールがあった。アンコール曲は、ショパンが何曲かと、ドビッシー前奏曲集から、今度は第1巻の有名な「沈める寺」。水中に静かにたたずむ寺院を思わせる冒頭、それが動的なイメージとなり、やがて元通り水中に戻っていくという曲である。

その「沈める寺」がまた良かった。水中の静けさから、一気に浮上する寺院。作曲家の考えていた曲想と同じかどうかは分からないけど、姿を現したのは、ヨーロッパの寺院というより、中国の、あるいは天平文化の赤く天に向かってぐいぐい伸びていくアジア調寺院。そして素晴らしい躍動感。どんどん伸びていったところで、いつの間にかまた冒頭の水の中に戻っていく。先ほどの動的イメージは一瞬の夢であったか。

この劇的な展開は、CDだと分からなかった。これまで聴いてきたCDだと、中間部はごちゃごちゃしているだけで、何のイメージも呼び起こさなかった。けれど、「沈める寺」のおおよそのイメージが私の頭にあったこと、そしておそらく最高の演奏だったから、この演奏の凄さがわかったのだろう。と考えているうちに気がついた。私はドビッシーの作る音楽を分かり始めたところなのだ。これから少しずつドビッシーを理解していけば良いのだ。

音楽は、いや何であっても、自ら動けばなにがしか得られる。演奏会前にCDを聴くことは続けよう。そして、また「演奏会前に演奏曲を聴いておく必要があるの？」と聞かれたらこう答えよう。音楽をより深く味わいたいのなら、CDを聴いていこう。必ずとはいわないけど、いい演奏会とそのための準備がそろえば、それは最高の体験になるよ、と。

木の魚 (マチコ・ムツゴスキー)

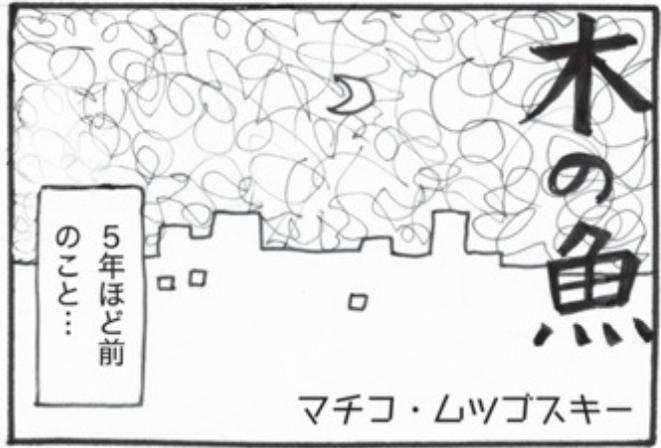


だまされた...

呪...

私は人生の
ドン底にいた...

もうだれも信じられぬ...



木の魚

5年ほど前
のこと...

マチコ・ムツゴスキー



♪今日一人類が初めて
木星に着いた
よォー

たま
という
バンドである

その中でも特に
惹かれたのが

フェンダー
フェンダー



そんな時ふいに
出会ったのが



私は彼に
なりたいたと思った

その日から自分も
ガキタタいい音が
しそうなものを
集め始めた

むくっ

ホー

フヤ...



ひとつ どうしても
欲しいものがあつた

独自の要塞を作るため
色々なガキタタ楽器を
集めていったが



ついた

パーカッションの
石川浩司さん

ホッカホッカ

ておなじみの

ホッカ
ホッカ
なべ

クッキーの缶
木の樽

タンバリン

彼が操るのは
ドラムセットではなく
このように様々な
「音の出るもの」を
集めた要塞だった

船乗りに限る
マウンテン
ワイズ

なその名前かけ

木の魚 (マチコ・ムツゴスキー)



ペットの王様

一路 真実

(イチロ マミ)



すつきりした上品な香りが鼻腔をすり抜け、張り詰めていた気持ち達が途切れる。顔を上げた遥の目には、曇りのないさわやかな青空に向かって咲く、白い木蓮が映る。花びらと同じ方角を向き、つぼみが今にも咲こうとしている。この香りだ、とつい口元が緩むと背後から頭を押さえつけられた。

「何をにやけとんねん。行くぞ」

一緒に隠れていた男が、遥を追い越し、木蓮のつぼみが指していた建物の方へ飛び出した。遥も慌ててその背中を追いかけて走り出す。

男が初めて家を訪ねてきたのは、猫のモカがいなくなつて四日目のことだった。海外から帰ってきたばかりのような、妙に派手な幾何学模様の上着に、くるぶしが少し見える太めのパンツを履いていた。見るからに胡散臭い雰囲気も漂っている。ちりちりした長髪を一つにまとめ、遥と母親を見つめると黒縁の眼鏡を持ち上げた。

「じゃあ、まず猫がいなくなった状況から聞かせてもらえますか」

部屋に入った男は、自己紹介もしないまま、関西なまりのイントネーションで、モカが逃げた日のことを聞き始めた。母がこやかに状況を話すと、男はモカの特徴や好きなおもちゃ、モカだけでなく家族の生活スタイルなどを簡単に聞いた。「はい、大体わかりました。搜索はそんなに難しそうやないんで、引き受けます。おそらく数日で連れて帰って来られると思いますよ」

簡単に手続きと料金の話をした後、モカの写真を手に部屋を出て行くこうとして振り返り、遥に馴れ馴れしく声をかけた。「モカはあんたになついているようやから、見つけたら確認を頼むわ。俺のことは、レオって呼んでくれや」

漆黒で分厚い眼鏡の縁をまた上げた。

今思えば、モカがいなくなった日は嫌なことばかりだった。朝、出かける時はいつも台所の所定位置で眠っているモカ

を確認するが、朝の時点で既にその丸っこい姿はなかった。どこかの窓辺で日向ぼっこでもしているのだろうかと特に気にもとめず、自転車にまたがった。

遥の朝の日課は、上履きを探すことから始まる。だから、毎朝高校には早めに着いていないといけない。たいていは下足置き場の近くの草むらに捨てられていくことが多いから、先の上履きを探してから教室に入るのだが、その日はどこにも見つからなかった。掃除用具入れやゴミ箱の中も探したけれど見つからず、結局靴下のまま教室に入った。

「また上履きなくなったの？」

教室に入ってきた志織がそう声をかけた。

「わざわざ毎日靴を隠すなんてさ。何なんだろうね」

遥が言うと、志織はうなずいて笑った。

「後で一緒に探そっか」

志織はかわいらしい。小柄で色が白く、につこり笑うとえくぼができる。入学してからずっと、遥の唯一の友達だ。何の

原因もなく突然に、誰がやっているかわからない靴隠しが始まって、クラスメイトが一人ずつ遥に話しかけなくなっていた。それでも、志織だけはいつもの笑顔で話しかけてくれた。

結局、上履きは女子トイレで見つかった。便器の水に浸かり、つま先に書かれた名前が遥の存在を主張していた。

「ひどい……」

背後から志織の声がしたけれど、振り返ることができなかった。他の誰に見られてもよかったけれど、志織にだけはこんな無残な姿を見られたくなかった。同情されるのは恥ずかしいし、何よりも志織までもが友達でなくなるのが怖かった。

誤って上履きを水没させたと伝えると、担任の高梨先生が緑色の来客用スリッパを持ってきてくれた。

「何だよ、遥。誰かにいじめられてんのか」

そうして茶化してきたけれど、逆にその言葉が重い。足裏が真っ黒になった靴

下で、スリッパを使うのが心苦しい。足下にひざまずいてスリッパを履かせようとした高梨が嫌だ。

「最悪」

遙が思った言葉を、先に言ったのはクラスメイトの有里香だった。顔を上げると、女子生徒で垣根を作り、その牙城にいる有里香と目が合う。視線をそらされ、代わりに垣根の方がこちらをにらみつけた。知っている。有里香は高梨に好意を抱いているのだ。

それが原因なのか、次の授業ではノートがなくなり、宿題の提出ができずに先生に怒られた。別の授業では、教科書を出そうとしたら、女性の裸が表紙の雑誌が出てきて、先生から怪訝な顔をされた。挙句にみんなの前で没収された。目に入った隣の男子生徒の顔があまりにも赤くなっていた。彼の本なのだろう。

教室の中で、誰も声を発していないはずなのに、背後からたくさんの笑い声に包まれているような気がする。みんなの視線が攻撃してくる。

そして、家に帰るとモカがいなくなっていた。遙は夜遅くまで近所を探し回り、母親が「また明日にしよう」と何度も声をかけてきたけれど、家に帰る気にならなかった。

数日後、レオに指示された事務所に向かうと、古ぼけた喫茶店に着いた。

「おお、こつちや」

入口から見える位置に、左手を上げたレオの姿があった。

「事務所なんて言って、ここ喫茶店だし」
遙が座ると、マスターがメニューを持ってきた。

「虎太郎はいつもここを事務所のように使ってるのよ」

マスターの見た目は、豪快な髭を生やした小柄な男性だけど、女言葉を使いながら、しなやかな身のこなしでレオの肩をもんだ。

「勝手に本名を言うなや」

マスターはべろっと舌を出し、ピンク色をしたエプロンのポケットに手を入れ

ながらカウンターの中へ戻っていく。

「虎太郎が本名？ レオじゃないんだ」

「まあ、あれやな。プロレスで言うたらリングネームや。タイガーよりライオンの方が強いやろ」

「それで、レオなんだ」

頷きながらずっとコーヒーをすすると、レオは話し始めた。

「モカは、依頼を受けた次の日にすぐ見つかつたで。でも、数日追ってたらおもしろいことがわかってな。まだ捕まえてへんねん」

「どうして？ 早く捕まえてよ」

「捕まえるのは簡単や。逃げたモカが何してたか、お前に見せたなつてな」

レオはどこで買ったのか、くすんだ虹色のジャケットを羽織ると立ち上がった。「ほな、行くで」

レオが指した先にいたのは、間違いないモカだった。遙が付けた赤と白のドット柄の首輪に、ゴールドのネームタグが光っている。薄い茶色の体とお尻に白い

ハートの模様が入っている。間違いなかった。レオは、本当に簡単な説明をしただけで、どんなに探しても見つからなかったモカを探してきたのだ。

「レオってやっぱりすごい」

「別にすごい。あんたら全然ペットのことわかってないんや。俺に言わせれば、そんな飼い主から逃げたなるのが当然や」
そんなレオの軽口にむっとしながら、モカを捕まえようと身を乗り出した。その瞬間、腕をつかまれた。

「まだや。モカがいなくなつて毎日何してたか見るんや」

民家の垣根の隙間を抜けて庭に入ったモカを確認すると、レオは遥の腕を引いて静かに民家に近づいた。隙間から見えた縁側には、老婆が座っている。モカは老婆の膝に乗り、丸まった。

「ミイちゃん、また会いに来てくれたんだねえ」

新しく付けられた名前を呼ばれ、背中をなでられながら気持ちよさそうに目を細めている。

「夜にはちゃんとおうちに帰ってるの？
どっかの飼い猫なんだろうけど、ミイちゃんが遊びに来てくれるから、おばあちゃんうれしよ」

老婆が首輪を触りながら、優しくモカに話しかけている。モカが知らない人と友達になっている。外の世界で人間と関係を築いている。盗み見ながら、少し複雑な気持ちになった。

「はい、お食べ」

老婆が置いた皿にはたくさんのおいりこが入っていた。ペろりとたいらげると、モカは大きく伸びをして歩き出した。

「もう行くの？ また来てね」

モカは細い壁の上に飛び乗る。

「次の家や」

レオが言ったとおり、モカは開いていた窓の隙間から、別の家に入り込んだ。モカが訪ねてきて喜んでる声が漏れ聞こえる。

「こうやって、いろいろな家を渡り歩いてるんや。しかも、すべて一人暮らしの老人の家。モカは、誰かに必要とされた

かったんちゃうか。お前が悩みを打ち明けてくれへんから」

「……悩みなんてないもん」

「俺はペット探偵になる前に人間専門の普通の探偵してたんやぞ。休みの前日もないのに、上靴が干してあるしな、毎日放課後は何もせんと家におる女子高生やろ。お前気づいとんのか知らんけども、通学鞆の横側に切られた跡があったで」

たった何十分しか家にいなかったはずなのに、それだけのことに気づいているなんてと遥は驚いた。

「モカは飼い主とは違って、社交的よね」

そうつぶやいた遥の顔を見ながら、レオは明るい声を出した。

「お前、明日から俺の付き人せえや。どうせ暇なんやから、俺が社会勉強させたるわ。学校が終わったら事務所に来いよ」

「事務所って、あの喫茶店でしよ」

「ほな、決まり。バイト代は出えへんけどな」

「えっ、待ってよ」

レオは家から出てきたモカにさっと近

づくと、抱き上げて遥の胸元に押しつけた。

レオの仕事ぶりは目を見張るものがあった。一週間前に逃げたインコを一日で捕まえ、溝へ逃げたハムスターをマンホールの下から泥まみれで見つけ出した。どんなに無謀に思える依頼も、レオは必ずペットを捕獲してくる。遥はそんなレオを尊敬し始めていた。

ある日、二人は依頼の電話を受けて大豪邸に向かった。夫人はきれいな身なりに豪華な宝飾品を身につけ、長いネイルはスワロフスキーがちりばめられている。一通り状況を話した後、夫人は高額な報酬を提示した。

「あなたの腕を信用しているの」
犬探しの依頼だ。しかも、昨日いなくなっただけで、遠くに逃げた可能性は低い。主婦でほとんど外にも出ないと言う夫人は、きつと周辺の搜索さえしていないだろう。遥でさえ、これは引き受ける案件だとわかった。しかし、レオは少

し間をおいて考えると、思いがけないことを口にした。

「お断りします」
荷物をまとめて帰ろうとするレオに、夫人がヒステリックに声を荒げた。

「どうして？」
遥も驚いてレオを見る。すると、夫人は机に真つ白の紙とペンを置いた。

「報酬が足りないのね。あなたの好きな額を提示してかまわないわ。お願いだから、ドルチェを探してほしいの」

レオはペンを取らない。
「そりゃ、金はようけあった方がええけど、そういうもんやないんです」

遥は石のように固まって、二人のやりとりをじつと聞いている。レオは頭をぼりぼりとかくと、言い聞かせるように夫人の目を見つめた。

「本当は、犬がどこにおんのかわかってんのとちやいますか」
何も言わない夫人の顔にさらに近づく。

「俺の本業はペット探しです。人間のめごとは、別の探偵に依頼してもらえま

すか」

夫人は首を大きく振った。

「私があなたに依頼したいことはドルチェを見つけてくること。それだけよ」

そう言うと、夫人はティーカップを手に取り、ゆつくりと飲み干す。レオは渋々頷いた。

「どうして最初断るなんて言ったの？」
帰り道、遥が尋ねると、レオはばかにしたような顔をした。

「お前、どのくらい俺の付き人やったら進歩するんやろな」
「だって、ドルチェだってそんなに遠く

にはいないはずでしょ。楽勝じゃん」
レオはふんと鼻で笑った。

「お前はいつも肝心なところが見えてへんな。いや、見ようとしてないんや。それがお前の悪い癖」

目をのぞき込むように顔が近づいてきて、遥は思わず顔をそらした。

「さっきのおぼはんと同じやで。学校で、ほんまは誰がお前に嫌がらせしとんのか

わかってんのやろ。でも、見なかったふりをして、誰かが解決してくれるのを待ってる。聞かなかったふりをして、時が過ぎるのを待ってるんや」

遥の心臓が大きな鼓動を打った。そのまま放課後の廊下に引きずり込まれる。あの日、足から崩れ落ちて、膝にあたった床の冷たさを思い出し、じわじわと体が冷えていく。

モカがいなくなったあの日は、本当に最悪だった。下校の際、下駄箱でスリッパを脱いだときに、水に浸かった上履きを忘れたことに気づき、教室に戻ろうとしていた。階段を上がったところで、廊下にいる女子生徒の声が聞こえてきて、遥はとっさに壁に身を隠した。

「遥のこと、飽きないの？」
有里香の声だった。

「まあ、協力してって言われたらやるけど。そうやって友達フリしながらよくできるよね。あたしは無理。すぐ態度に出ちゃうからさ」

有里香が誰に向かって話しているか、

遥は相手が話し始めるのをじっと待った。「……その方が間近で見られるんだよ。人の引きつった表情をさ」

その声を聞き、遥の心臓はびくんびくんと体中を震わせ始めた。思わず声が出てしまわないように、口を両手で押さええる。

「ゴキブリだって、一瞬で殺すよりじわじわ弱りながら死んでいくのを見る方が楽しくない？」

きゃっきゃつと高い笑い声ははじける。「かわいい顔してほんと悪趣味だわ、志織って」

楽しそうな話し声が廊下を抜けていく。壁に背中を這わせたまま、反対側の階段から二人が降りていくのを待って、遥は冷たい床に崩れ落ちた。かわいい親友の仮面を被って、中身は平気で人を傷つけるサディスト。遥は鼓動が静まるまでそのまま動けなかった。

志織の顔が浮かぶと、体は拒否反応で震える。レオが肩を抱くと、遥は首を横に振った。

「私ね、いつも間違った方ばかりを選択してきた気がするの。いつからか嫌がらせされるようになったのも、きっと私が間違った選択をしたせいなんだ。友達が志織だけになったのも、高梨のクラスになったことも、今の高校に入ったのも」
遥の目から小さな滴が転がり落ちるようにこぼれた。

「間違った選択から、さらに間違った選択を重ねて、そうやって生きてきたの。だから、もうどこで間違ったのかわからないし、これからもきつとずつと間違った選択をし続けるんだと思う」

道は太陽の光をばらまいたように黄金色に染まっている。少しずつ思いを発すると、震えは徐々に収まっていく。

「例え間違ったとしても、俺たちは選択し続けるしかあらへん。誰にも正解なんて選べへんのやから」

レオは遥の目の前で人差し指を立てた。「お前が自分のことを責めるのは勝手や。だけど、お前の心を敏感に感じ取るのはモカなんやで。だからこそ、お前は間違

った選択をしたとしても、それを正しいものにしていく責任があるんや」

通り過ぎていく自転車の人が、怪訝な顔をしてレオと遥を見た。そんなこともお構いなしに、レオは肩に置いた掌にぐつと力を入れた。

「人は何かを失いながら生きていくもんやで。わかるか？ 俺の仕事は、人が失ったものを見つけては元に戻すことや。失っては見つける。また失っては見つける。その連続や」

涙で前が見えない遥を抱いたまま、レオは大股で歩いた。強引に進むレオに身をまかせ、どこまでもいける気がした。レオの後ろを動物の大群が追いかけてくる。たくさんの動物を引き連れて堂々と、レオは自分の道を進んでいく王様のようにだった。

「ええから、頭下げろって」

レオは無造作に遥の頭をつかんだ。

「痛いってば」

にらみつけた遥を無視して、レオは建

物を見つめていた。

「ドルチェはあの建物の中におる」

白い木蓮の下を走って飛び出して行く。カラフルな背中を追いかけて、遥も慌てて駆け出す。大きなビルの中に、スーツを着た人たちが吸い込まれていく。その暗い隙間を縫うように、色彩を放つ異分子が紛れ込んでいく。

「あんな一等地の豪邸に住んどるんやで。ネットで検索すればすぐ出てくるわ」

二人が飛び込んだ建物は、ドルチェの飼い主の夫が経営する会社だった。

すると社長室の前までたどり着くと、レオの足音に呼応するように、大きな犬の鳴き声が聞こえた。

「おるで」

どうやって入ると遥が問うよりも早く、レオは既にドアノブを回していた。

「誰だね、君たちは」

突然入り込んできた二人を見て、社長はそう言ったがすぐに状況を飲み込んだようだった。というのも、ドルチェが思い切りしっぽを振ってレオに飛びついた

からだ。

「奥様にドルチェを探すよう頼まれた者です」

レオはしゃがむと、手際よくドルチェの首輪にリードをつなぎ、体をさすった。「よくここにいと分かっただな」

「お宅に何って話を聞くと、僕が奥様から電話を受けたその日にドルチェがおらんようになったと言われました。特に犬は帰巣本能が強い動物やから、普通はおらんくなつたその日は近辺を探るか戻ってくるのを待つ飼い主が多いんです。でも、奥様の場合は、ドルチェが家におらんと分かって数時間ですぐ僕に電話をしてきた。つまり、ドルチェが連れ去られることを予想できていたのではないかと思っただんです」

社長は冷静にレオの話を聞いている。

レオは、ドルチェの整ったページュの毛並みを逆立てるようになでる。

「奥様は仕事もしてへんし、ほとんど外に出ることもない。そんな方からドルチェを奪い去ることのできる人物。それは

「ご主人以外には考えられへんのですわ」

「さすが、ペットのことも飼い主の気持ちも分かるんだな」

にこりと笑ったその顔は、とても安らかな表情が浮かんでいた。まるでレオが訪ねてくるのを待っていたようだった。「ただ、僕はペットを探すために雇われただけなんで、それ以上のことはできないですよ」

気持ちを悟ったようにレオが言うと、社長は立ち上がった。

「それでいいんだ。ドルチェは私の会社にいる。だから、彼女がここに迎えに来ればいい。そう伝えてくれないか」

「でも、依頼主の元に返すまでが僕の仕事なんで」

レオがドルチェを連れて行くこうとする、先ほどまでの社長の優しい表情が一変した。

「依頼料は私の金だ。私が払うから、君の仕事はここまででいい」

「だったら、あなたが夫人に電話をして、迎えに来いと伝えたらええやないですか」

レオの言葉に社長は首を横に振った。

「違うんだよ。私は、妻に私以外の他者と関わりを持ってほしくないんだ」

社長はもう一度、立派な椅子に腰掛けると両手を顔の前で組んだ。

「妻は数年前から他者との関わりを絶つてしまったんだ。今は家にいて買い物もできる時代だし、我が家の庭は広いから、ドルチェもそこで走り回れば散歩にも出なくていい。いつの間にか、妻は誰とも話さず、全く外出しなくなってしまったんだよ」

呆れた顔をしているレオを横目に、遥は思わず口を挟んだ。

「私が……毎日奥さんに会いに行きます」

思ったより、大きな声が出ていた。「ドルチェの散歩に、一緒に出かけようって、毎日誘いに行きます」

社長の顔は一気にほころんだ。レオは馬鹿にしたような表情で遥のことを眺めていたが、勝手にしろと鼻で笑った。

ドルチェがしっぽを振りながら、木蓮

の下をリードを引っ張って進んでいく。

「俺らが夫人の家に呼ばれたんも、結局はあのおっさんの仕業やったんやろな」

「どういう意味？」

「あのお婆はんがドルチェがいなくなつてすぐ俺らを呼ぶことなんて考えつかへんやろ。あのおっさんがうちのチラシでも渡して、電話するよう仕向けといたんやな」

レオはポケットからくしゃくしゃの紙を取り出す。受け取ると、遥は思わず吹き出した。レオの下手な字が乱雑に躍っている、手書きのチラシだった。

「たっくさん依頼が来るように、私が作り直してあげる」

それを聞き、レオはにやりと笑った。

惨めだったのか。他人も、自分も不幸
せなやつだと思っていたのか。そうかも
知れない。しかし、子供の頃から、ポケ
ットに星屑をつめていた。いつもこころ細
い時にはポケットのなかの闇をまきぐっ
た。明るい絶望というものだってあるの
さ。真暗なポケットに宇宙があり、希
望の星はそのうちに太陽系に飛びだ
す。うつむいて歩きながら、そう考えて
いた。あの頃、辛さと屈辱を味わったは
ずなのに、いまは懐かしい。たぶん人に
とって大切なことはポケットの中の星屑
なのだ。

浅井慎平「ポケットに星屑を」

Philosophy of Stardustbooks

——文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているのだろうか？」

そう思ったとき、手にとった雑誌が教えてくれた。

“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイとつながる。

スポーツが好き。アウトドア
が好き。決して嫌いなわけでは
ないけど、たまにみんなとノリ
が合わないときがある。

小説が好き。映画が好き。漫
画が好き。でも、オタクと呼ば
れる人たちとは少し違う気が
する。

ひとりでは考え込み、ノートに
書きつけ、誰かと出会いたいと
試行錯誤を繰り返す。

そんな人たちがつながり、自
己表現する場をつくりまします。

星屑書房
STARDUST BOOKS

星屑書房は文化・芸術活動を推進する団体です。

stardustbooks@live.jp <http://stardustbooks/soragoto.net/>

編集後記



天沼 太郎

気の迷いか、数年ぶりにガンブラなど買ってしまいました。2週間、3体も組み上げてしまうハマリよう。ものを作るっていいですね！



馬場 貴生

久しぶりにマンガを描きました。こう見えても、昔は漫画家を目指していたんです。これからもたびたび描こうかな。



松田 定幸

「タンカトイラスト」の「終志・淡志」が、修練・鍛練と同じ読み仮名なのは、偶然の一致です。多分。



ぼえまる

初めまして。ぼえまる、と言います。エッセイと詩を主に書いています。著作は「びたみんぼれっと」(太陽書房)、「ぼえまる」(パレード社)、「点と文」(年二回発行の季刊誌)等。大分県在住の一九七五年生まれ。大分県詩人連盟に所属。栄養士免許あり。よろしくお願ひいたします。



間々えいよ

黒い靴になめくじがのっかっていて、きらきらとしたものを出していました。塩をかけようかと思いましたが、書いた通りやめました。翌朝みたら、黒い靴がなめくじアートに！これ流行ったら面白いな。



一路 真実

第五十一回福岡市「市民文芸」小説部門で大賞を受賞しました。うれしかったです。最近、ペットの文鳥の爪を切るのに苦戦しています。爪が長いと引っかかって足によくないのだそう。何か良い方法を教えてください。



マチコ・ムツゴスキー

「おそ松ねえ」と思っていました。気がつけば自分もはまっています。ネコ好きの一松派でしたが、あざといトッティも母性本能をくすぐられます。



詠人不知

魔王



甲斐 聖子

初参加です、よろしくお願ひします。

星屑書房は、好き勝手に表現活動を行っていく文化系サークルです。フリーペーパーの制作、配布が中心ですが、他の文化系活動も取り入れたいと思っています。「こんな活動してみたい！」という提案募集中☆少しでも興味を持たれた方は、こちらにご連絡ください。お待ちしております！

stardustbooks@live.jp
http://stardustbooks.jimdo.com/

創星 第13号

2016年6月12日 初版

発行元 星屑書房

<http://stardustbooks.jimdo.com/>

©2016 STARDUST BOOKS, Printed in Japan.

本書を無許可で複写・複製することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。